

TOYAMA KAZUYUKI MEMORIAL ARCHIVES
OF
MODERN JAPANESE MUSIC
LECTURE CONCERT SERIES

日本近代音楽館レクチャーコンサートシリーズ

VI

前衛の種子たち——「グループ音楽」の日々

講演

佐野光司

音楽学

座談会

水野修孝

作曲家・「グループ音楽」メンバー

塩見允枝子

作曲家・「グループ音楽」メンバー

一柳慧

作曲家

佐野光司 (司会)

〈音源再生〉

- 即興演奏「デュエット」
(小杉武久+水野修孝 1958)
- 集団即興「オートマティズム」
(グループ音楽 1960)
- 集団即興「メタプラスム・9-15」
(グループ音楽 1961)

ほか

2017年

11/11 (土) 14:00開演 [開場13:30]

明治学院大学白金キャンパス
アートホール

入場無料 要予約 【10月23日(月)から受付開始】

予約受付 東京コンサーツ

Tel: 03-3200-9755 (平日10:00~18:00)

Fax: 03-3200-9882

主催

明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

制作協力

東京コンサーツ

前衛の種子たち—「グループ音楽」の日々

グループ音楽 戦後日本の最前衛

1950年代の終わり頃、日本の現代音楽の最前衛は「軽井沢現代音楽祭」(57~59)に集約されるようにセリー音楽だった。ジョン・ケージの名前は知られていたが彼の音楽の内容・意味は全く知られていなかった。

「グループ音楽」という名称は何年に付いたか定かではないが、彼等が自分たちの即興音楽を開始したのは1958年からだ。つまりセリー音楽が最前衛だった時代に、60年代を支配する不確定性の音楽(当時はまだこの言葉は普及していなかった)を始めていたのだ。

水野修孝、小杉武久たちが目指したのは、一口に言えば「生きている音を楽譜の中に閉じ込めない」というものだったと思う。そうした思考はケージが早くから持っていたが、彼等はケージの思考を知る前に、日本で始めたのだ。「グループ音楽」第1回演奏会は1961年、つまりケージの来日の前年である。彼等は集団で即興演奏を試み、そこから各々の道を見出していったが、集団による即興演奏がヨーロッパで話題にされたのはシュトックハウゼンの《7つの日より》(68)からだから「グループ音楽」が如何に時代に先行していたかが分かる。

佐野光司

*日本近代音楽館には記念文庫「水野修孝資料」「塩見允枝子資料」が設置されています。

2017年

11/11 (土) 14:00開演 [開場 13:30]

明治学院大学白金キャンパス アートホール



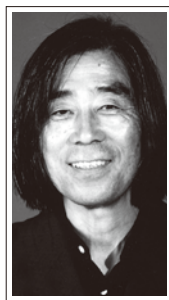
明治学院大学 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

- 品川駅 [JR / 京浜急行]
高輪口より都営バス「目黒駅前」行「明治学院前」下車
または 駅より徒歩約17分
- 目黒駅 [JR / 東急目黒線 / 東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線]
東口より都営バス「大井競馬場前」行「明治学院前」下車
または 駅より徒歩約20分
- 白金台駅 [東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線]
2番出口より徒歩約7分
- 白金高輪駅 [東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線]
1番出口より徒歩約7分
- 高輪駅 [都営地下鉄浅草線]
A2番出口より徒歩約7分



佐野光司 Koji SANO

1937年静岡県富士宮市生まれ。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業後、1965年、大学院を修了、桐朋学園音楽部門に勤務する。1967年、芸術祭参加レコード『ショパン マズルカ集』の研究解説で芸術祭文部大臣奨励賞受賞。以後、芸術祭参加レコードの研究解説、企画、監修等で、1980年までの間に8回の芸術祭賞(内2回は大賞)を受け、芸術祭レコード部門の審査員も数回務める。この間、1977-78年にウィーン留学。1983年より『レコード芸術』誌の現代音楽部門の月評を担当、1985年より「中島健蔵音楽賞」審査員、1993年より「京都賞」専攻委員・審査委員を務めるなど、現代音楽研究の第一人者として、多方面にわたって研究評論活動を展開している。現在、桐朋学園大学名誉教授、サントリー音楽財団評議員、「芥川作曲賞」運営委員長を経て、サントリー芸術財団顧問。訳書に『20世紀の作曲—現代音楽の理論的展望』、共著に『石井眞木—西の響き、東の響き』『武満徹—音の河のゆくえ』『日本戦後音楽史』(全2巻)他がある。



水野修孝 Shuko MIZUNO

1934年生れ。1961年東京藝術大学音楽学部楽理科卒。1958年より同級生の小杉武久と即興演奏を開始(水野:チェロ、小杉:ヴァイオリン)。のちに刀根康尚、塩見允枝子をはじめ、戸島美喜夫、柘植元一らが加わって、1961年9月15日、草月会館で「グループ音楽」として公演を行い、注目を集めた。1973年からロックフェラー財団の招きで1年間アメリカ留学。その後、作曲活動の幅をひろげ、「天守物語」を始めとする3つのオペラ、4つのミュージカル、大作「交響的変容」を含む管弦楽曲、室内楽曲、打楽器作品、電子音楽、テープ作品、合唱・独唱作品、ジャズ作品、劇付随音楽、モダン・ダンスのための作品など、多岐にわたる作品を発表。混声合唱のための「幻」で芸術祭優秀賞(1975)、「ジャズオーケストラ73」「ジャズオーケストラ75」でジャズディスク大賞3位(1973、1975)、「交響曲第3番」ほかで芸術祭優秀賞を受賞(1997)。



塩見允枝子 Mieko SHIOMI

1961年東京藝術大学音楽学部楽理科卒。在学中より「グループ音楽」を結成し、即興演奏やテープ音楽の制作を始める。1964年ニューヨークへ渡りフルクサスの活動に参加。郵便によって世界各国の人々と同一のイベントを行なう「スペイシャル・ポエム」のシリーズを開始。帰国後はイベントをより複雑な演奏芸術に拡大し、インターメディアへと至る。1970年大阪へ移住。以来、ことばと音を中心にした室内楽を多数作曲。1990年ヴェニスでのFluxus Festivalへの参加を機に、欧米でのフルクサス系の催し物に関わりと同時に、国内でも独自の企画を実行。又、90年代には電子メディアに興味を持ち、コンピュータを扱う音楽家達と共同で演奏会を行なう。2012~13年ピアニスト館野泉氏の「左手の音楽祭」では、委嘱作や献呈曲が初演された。現在、京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・特別招聘研究員。著書:「フルクサスとは何か」(フィルムアート社2005)「パフォーマンス作品集」(自家版2017)他。



一柳 慧 Toshi ICHIYONAGI

神戸市生まれ。高校時代(1949年)に毎日音楽コンクール(現日本音楽コンクール)作曲部門に第1位入賞。ピアノを原智恵子、B.ウエブスターに師事。19歳(1952年)で渡米、ジュリアード音楽院卒業。この間にE.クーリッジ賞、A.グレチャニノフ賞を受賞。留学中にジョン・ケージと知己を得、偶然性や図形楽譜による音楽活動を展開。1961年20世紀音楽研究所の招聘で帰国、自作品並びに欧米の新しい作品の演奏と紹介でさまざまな分野に強い刺激を与える。ウィーン・モデルン、ベルリン・フェスティバル、イギリスBBC、パリ管、スイストーンハーレ、フィンランド・アヴァンティなどから作品の委嘱を受け、欧米各地で精力的に作品発表と演奏活動を展開。国内では尾高賞を5回、フランス芸術文化勲章、毎日芸術賞、京都音楽大賞、サントリー音楽賞他受賞多数。2008年より文化功労者、2016年度日本芸術院賞及び恩賜賞を受賞。現在、神奈川芸術文化財団芸術総監督。作品はグランド・オペラ4曲、10曲の交響曲、12曲の協奏曲、6曲の雅楽、電子、コンピューター音楽など、上演回数もきわめて多い。

©岡部好